

# 令和7年度 市民総参加子ども育成運動推進委員会全体会 ワークショップ：「こどもたちの声」をまなざし運動につなげよう 報告書

## 1. 概要

日時：7月28日 10:40～12:00

人数：27名（家庭分科会 4名、地域分科会 6名、企業等分科会 3名、学校等分科会 5名、まなざし運動兼務主査 9名）

講師：認定NPO法人 地球市民の会 事務局長 岩永 清邦 氏

## 2. 目的

まなざし運動は、今年でスタートから18年目となる。その間、子どもや親を取り巻く環境は大きく変容している。そうした中でまなざし運動が環境の変化に対応できているのか、また、これからのこどもたちに必要なまなざし運動とはどのようなものであるのか、ということを議論する場が必要であることから、6月15日に開催された「佐賀市こどもミーティング2025」で出された「こどもたちの声」を委員全体で共有し、これからのまなざし運動につながる意見を求めるために意見交換会を行う。

## 3. 委員から出された感想、意見

### ○子どもと地域が関われる場、イベント

- ・小学生だけでなく、中高生も関わりたいという意見がある  
→異年齢との交流を求めているということでは  
子どもが「役に立った」「認められた」と思えるような場、長期休業中に関わる場を作っていきたい。
- ・子どもが中心となる場、イベントによって子どもの主体性を伸ばし、学びを保障する。  
例) 巨勢 遊びひろば  
大人は見守りだけ  
子どもがいると盛り上がる、協力◎、地域のまとまり◎
- ・地域と子どもが顔見知りになれる場所を増やす  
あいさつ、声掛けをしやすいように（不審者情報など、なんでも警戒してしまうため、顔見知りになることであいさつがしやすくなる）  
地域に、子ども、保護者の存在を認知してもらえるように
- ・公民館がキー

### ○子どもたちの声

- ・居場所が欲しい、悩みを聞いてほしい、ほめてほしいなど  
第3の居場所、安心できる大人が必要
- ・見守られていると感じるのはどんな時か  
声掛け？場所？
- ・小学校の下校が早くなっている中、親がいない家に勝手に入ってはいけないと教わることが多い  
→子どもの集まる場所が必要 公民館の活用は？

## ○企業関係

- ・キッザニア佐賀版  
→行政は一過性であるため、継続が必要である  
職場体験→即戦力として企業へ入社
- ・中学校職場体験で学校の仕事や農業を体験できるとよい
- ・地域の中に企業が入り込むことを期待
- ・まなざし休暇  
ワークライフバランスが大事  
市だけでなく、企業も取り組んでくれるとよい

## ○親に対して

- ・子どもの非行は親の責任？  
親も困っている、保護者も余裕がない、働くことで子どもへのかかわりが減る  
→親自身の学びの場も必要
- ・悩んでいる親が相談されることも
- ・親は卒業したら子どもから離れてしまう  
→保護者が引き続きまちづくりに入ってくれる（まなざしを大人の普通に）

## ○まなざし運動の周知

- ・子どもとかかわりがない大人の意識改革、きっかけづくり  
誰もが「まなざし委員」とするとPR（ネット、市報などを介してすべての市民へ）  
負担感がないように（できるタイミングで、できることを）
- ・地域や企業などへPR
- ・学校でのPR  
子どもがまなざしを見て、「知ってる！私たちの応援団でしょ！」と言ってもらえるように
- ・SNSが一人にならないためのツールとなっている。SNSでのトラブルが多い  
必要以上に使わなくてよいと教えるような場が必要  
現実でのつながりがあればあまり使わなくてもよくなるかも

## 4. 事務局によるまとめ

- ・地域の子どもとかかわりがない大人が、子どもや親の存在を認知し、まなざし運動に関わっていくことを求める声が複数あった。
- ・子どもが中心となる場やイベントを作ることで、子どもたちの「認められたい」「頼られたい」という声にこたえようとする意見があった。
- ・職場体験の拡充と深化によって企業がより地域に密接に関わることを求めており、まなざし運動としても企業へのアプローチを続けていきたい。
- ・子どもの居場所や、地域と子どもが交流できる場所として公民館を上げる意見が多かった。